

# つながる 人・仕事

◇5

省エネ、耐久、断熱などの性能が十分であることは当然で、住まいづくりの要は今や、デザイン、素材、街の印象といった「感性」にシフトし始めたようだ。それと軌を一にするように、素材としての「木」が改めて見直され、女性デザイナーの活躍も目立つようになってきた。二つの背景にあるものを考える。  
(本多信博)

## 木の魅力とは何か

住まいは今、殺伐とした社会にあって唯一心を落ち着かせることができる「癒やし」の空間になることが求められている。

その中で、家具デザイナーとして名高い小泉誠氏は、人

# 住まいは「癒し」の時代へ

今年4月、国民に木の家の魅力を伝えるために発足した一般社団法人「木のいえ一番振興協会」は11月16日、木を扱うプロフェッショナル同士が語り合う第1回ミーティングを都内で開いた(写真左)。



盛況だったミーティング

が木をやさしい素材と感じる理由についてこう語る。「人と木は年齢がほぼ同じです。木も60〜80年で大樹になりますよね。石は石になるのに200万年かかるそうです。また、石や鉄と違って、木は人間の手作業で仕事ができますから生命体としての親和感が高いのです」

建築家で近畿大学准教授の宮部浩之氏はこう語る。「人はそよ風を気持ちよく感じるように、穏やかなものを好みます。木は住宅の部材に使われると歳月と共に徐々に風合

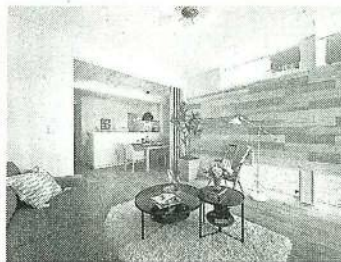
を愛え、100年、200年という「時」の流れを穏やかに刻み込んでくれます」

「癒やし」の空間に訴えるプランに力を注ぐ。

の無垢材が使用されている。設計したのは同設計課係長の酒井かおり氏。桐のもつやわらかい肌触りが女性ならではのセンスを匂わせる。

「現わし使用」の工法を更に広めていく必要がある」と訴える。

さいたま市による先進的モデルタウン「浦和美園E1フオレスト」の見学会が11月21日、浦和美園駅近くの現地で開催された。中央住宅、高砂建設、アキュラホームの3社が計33棟の分譲住宅を供給。自然素材の注文住宅を手掛ける高砂建設は、地元・飯能で育った「西川材」をふんだんに使った「現わし使用」の



木肌を楽しむリビングルーム

し好評を得た「ラストリアコ1デ柏」(9区画)も最近成功したプロジェクトだ。同社設計部企画設計課の2人の建築士、飯島ゆり氏と戸田みのり氏(写真)を中心に、女性スタッフが理想の住まいとは何かを徹底的に議論した。

特に共働きで、仕事と子育てなど忙しい日々を送っている女性たちに共感してもらえ、家事動線と、夫や子供とのふれあいを育む空間づくりに気を配ったという。ランドスケープでは敷地内への車の進入口を一つにすることでゲ



建築士の飯島ゆり氏(左)と戸田みのり氏(現地で)

る。更に道路交差点は車のスピードを落とさせる効果があるカラー舗装を採用。子供たちが敷地内で安心して遊ぶことができるように配慮した。住まいが「癒やし」の時代に入った今、女性目線のプランや商品企画が成功を収めている理由は明らかだ。女性は住まいを日常における唯一の癒やしの空間と捉え、家族の心が一つになる場所であってほしいと願っている。その思いは、あたかも「木」のぬくもりに包まれているかのよう。優しい慈愛に満ちている。

おわり